—編 集 後 記—

2025 年度より，本誌編集委員の末席に加えさせていただきました．どうぞよろしくお願い申し上げます．

久しぶりに「土壌の物理性」に論文を投稿しました．テーマは，手取川の水利用と千里浜海岸の侵食との因果関係です．投稿から受理までには約一年を要し，その間，査読者や編集者とのやり取りが複数回にわたって続きました．査読者からは批判的なコメントを数多くいただきましたが，それらは研究の質を高めるための貴重な指摘であったと思います．実際，それらを踏まえて修正を重ねたことで，論文は大きく改善されたと感じています．査読者や編集委員の丁寧な対応に心から感謝するとともに，私も査読者あるいは編集委員として，誰かの研究を支える一助となれるよう努めていきたいと思います．

今回の論文投稿を通じて，もう 1 つ，感謝を意識するようになった対象があります．それは身近な自然環境です．

石川県には，車が走れる日本唯一の砂浜海岸「千里浜なぎさドライブウェイ」があります．大型観光バスも走行できるほど締まった砂質を持つ海岸で，多くの人々に親しまれている観光地です．しかしこの砂浜海岸は近年，侵食により消えつつあります．

千里浜の砂は手取川由来とされています．その上流域には，扇状地の水田農業を支えるためにダムや頭首工が建設されてきました．河川流量の調整や効率的な取水によって手取川の水の流れは変わり，その結果，砂浜海岸へ供給される土砂量が減少しました．農業用水の確保は，人々の暮らしを支えるうえで不可欠ですが，千里浜を含む石川県西側の砂浜海岸の侵食を招く一因にもなっています．

「アタリマエのことをアタリマエと思わないように」と恩師が言っていたことを最近よく思い出します．学生だった当時の私は，その言葉の意味を十分に理解できませんでした．しかし，砂浜海岸の侵食を考えるなかで，その意味を少しずつ実感できるようになってきました．身近な自然は，決してアタリマエに存在しているのではありません．人間活動によって，その存在が脅かされることもあります．「有り難い」とは，その語源も含めて，こういうことなのだと思えるようになりました．人間活動の影響を受けながらも残っている自然は「有り難い」存在なのでしょう．身近にある自然への感謝の気持ちを忘れずに，これからも人と自然との関わりを見つめ，さらには両者の調和のあり方を考え続けていきたいと思います．

百瀬年彦（編集委員）

土壌物理学会

事務局構成	会　　長	西村　　拓	東京大学 大学院農学生命科学研究科
	副 会 長	宮本　輝仁	農研機構 農村工学研究部門
	庶務幹事	山﨑　琢平	東京大学 大学院農学生命科学研究科
	庶務幹事	本間　雄亮	農研機構 農村工学研究部門
	編集幹事	坂井　　勝	三重大学 大学院生物資源学研究科
	会計幹事	西田　和弘	東京大学 大学院農学生命科学研究科
	会計監査	橋本　洋平	東京農工大学 大学院農学研究院
		小林　幹佳	筑波大学 生命環境系
編集委員会	委 員 長	渡辺　晋生	三重大学 大学院生物資源学研究科
	委　　員	青木　伸輔	香川大学 農学部
		朝田　　景	農研機構 農業環境研究部門
		加藤　千尋	弘前大学 農学生命科学部
		小島　悠揮	岐阜大学 工学部
		高松　利恵子	北里大学 獣医学部
		辰野　宇大	北海道大学 農学部
		徳本　家康	佐賀大学 農学部
		森下　智陽	森林研究・整備機構 森林総合研究所
		百瀬　年彦	石川県立大学 環境科学科
		山下　祐司	東京大学 大学院農学生命科学研究科
		吉岡　有美	岐阜大学 応用生物科学部